

『元朝秘史』におけるジュルキン集団を 殲滅する非明示的論理

—ブリ・ボコがチンギスの味方であったという仮説に基づいて—

**The Underlying Logic Justifying the Elimination of the Jürkins in the
Secret History of the Mongols:
A hypothesis that Büri-Bökö was Genghis Khan's supporter**

藤井 真湖

Mako Fujii

Abstract

According to a series of sections from §129 to §140 in the *Secret History of the Mongols*, Büri-Bökö is generally regarded to have been a foe of Genghis Khan; he was in charge of the feast of the Jürkins, although genealogically he was not a direct member of their community. At the feast, Büri-Bökö stabs Genghis's half-brother, Belgütei, in the shoulder. The Jürkins became Genghis Khan's enemies after they did not fight with him against the Tatar people. The battle against the Tatars was also demanded by the Jin dynasty. This paper questions Büri-Bökö's hostility by posing the hypothesis that he took Genghis Khan's side at the feast. In fact, strangely enough, Büri-Bökö appeared again after the battle against the Tatars resulted in Genghis's victory, when he was ordered to wrestle with Belgütei. If he was truly a foe of Genghis, he would already have sought shelter, refusing to be killed by Genghis, who was planning the wrestling as a good excuse. The naïve attitude of not taking refuge when facing this crisis seems related to this hypothesis. Moreover, Genghis' reproach for the Jürkins was related to a number of small incidents that happened at the feast; it was not related to their nonparticipation in the campaign against the Tatars, their *shared* enemy. Why were these small incidents needed as an excuse for Genghis to eliminate the Jürkins? This paper examines, firstly, the validity of the hypothesis that Büri-Bökö was Genghis's intelligence agent acting within the Jürkins, and secondly, the validity of the interpretation that Genghis intended to eliminate them, regardless of whether or not they participated in the battle against the Tatars.

0. はじめに

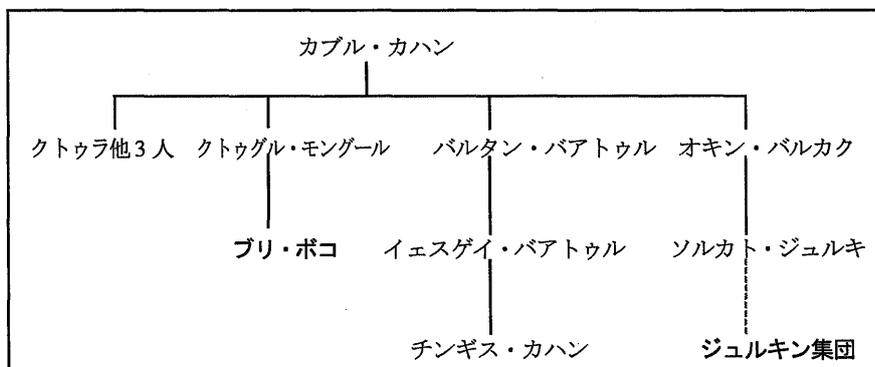
筆者はこれまで四部叢刊本に基づいてモンゴルの古典『元朝秘史』(以下、秘史)についての一連の論考を著してきた(藤井 2009,2010a,2010b,2011a,2011b, 2013a,2013b,2013c,2014a,2014b, 2015)。本論の対象のジャンル規定、その取り扱い範囲、対象文献、そして分析の方法論については、藤井(2013c)に示しておいた通りである(藤井 2013c: 43-44)。改めて繰り返しておくべき重要な点は、第一に、これら一連の論考においては、秘史のテキストの成立に関する諸説を一旦括弧に入れて、続集2巻を含めた秘史を戦略的に「連続体」すなわち「ひとつの作品」として扱ってきたことである。

第二に、第一の点と連動することなのであるが、テキストのこうした扱いを史実という側面からではなく、ひとつの言語芸術作品として扱ってきたことである。この第二の点は、筆者の研究の基礎が英雄叙事詩研究に基づいていることと深く関連している。それゆえ、一連の論考においては、常に、書かれた叙述そのものだけに焦点を当て、テキスト内部に閉じられた物語の論理を析出することに努力を傾注してきた。そこで明らかになった“秘史の論理”が史実とどの程度符合しているのかは今後の課題である。本論もまた、物語としての“秘史の論理”がいかなるものであったのかを明らかにする試みのひとつである。

1. 本論の目的と議論の流れ

1. 1. 本論の目的

本論の目的は、表題に示したように、ブリ・ボコという人物がチンギス・カハンの味方であったという仮説に基づいて、チンギス・カハンによるジュルキン集団殲滅を正当化する論理を探ることであるが、まずは、ブリ・ボコが明示的にはチンギスの敵であるように叙述されながら、なぜ非明示的にはチンギスの味方であったという仮説が生まれるのかの理由を提示することに努めたい。



ここで議論の対象になるブリ・ボコとは、巻4 §140 に拠ると、モンゴル諸集団における初代カハンであるカブル・カハンの七人の子供たちのなかの第三子の子供である(図1)。

図1 ブリ・ボコとジュルキン集団の系譜上の位置

ジュルキン集団のほうは、巻4 §139 によると、カブル・カハンの七人の子供たちの長子オキン・バルカクの長子ソルカト・ジュルキを祖とする集団である。チンギス・カハンは、巻4 §140 によると、カブル・カハンの七人の子供たちの第二子バルタン・バアトゥルの息子イエ

スガイ・バアトゥルの息子である。それゆえ、カブル・カハンを親とすると、チンギス・カハンの属する集団、ジュルキン集団、そしてブリ・ボコの属する集団は、互いに兄弟集団の関係にあることになる。

チンギスがジュルキン集団を殲滅する理由として挙げる口実をみると、対タタル戦に参加しなかったというよりも、後続の箇所を確認するように、§ 130 と § 131 のふたつの節で叙述されている、チンギス陣営がジュルキン集団とおこなった宴会でのめ事が深く関係しているように読める。それゆえ、本論のもうひとつの目的は、なぜ、ジュルキン集団を殲滅する理由として、対タタル戦への不参加だけでは足りなかったのかを明らかにすることである。

問題のこの宴会においては、チンギス側の宴会係である異母兄弟ベルグテイがブリ・ボコに肩を切り付けられるという事件が起こる。この出来事はチンギスに関わる系譜についての叙述部分にも現れている点からみても（巻1 § 50）、重要な事件であることが暗示されている。しかし、明示的な流れにおいて、この宴会の出来事が、ジュルキン集団殲滅の論理を形成するうえでなぜ重要であるのかは不明としかいいようがない。そもそも、ジュルキン集団のサチャ・ベキ、タイチュはすでにチンギス傘下にいたにもかかわらず、なぜジュルキン集団を抹殺する必要があったのだろうか。

以上の二つの目的は密接に関連しており、最初の目的は第二の目的の前提となるものである。

1. 2. 議論の流れ

1. 1. で述べた二つの目的のため、2. においては、議論に関わる秘史の該当部分の内容を要約する。ここでは、巻4 § 129～§ 140 の12節がそれに当たるので、節ごとの概要を示す。そのうえで、3. 1. でブリ・ボコが非明示的にはチンギスの味方であったという仮説の妥当性を述べる。その妥当性を述べた後、3. 2. ではジュルキン殲滅の論理をタタル集団との関係で論じる。4. においては、再び2. で述べた概要に沿って、明示的な内容を非明示的な観点から読み解くという作業をおこないたい。5. においては、結論と結論から導かれる副産物、そして今後の課題を示しておくことにしたい。なお、本論で原文を引用する場合は、栗林均・确精扎布編（2001）に基づいた。邦訳は小沢重男（1986）に基づいているが、カナ表記や表現については若干変えたところがあることを断っておきたい。

2. § 129～§ 140 までの概要

以下、巻4の§ 129から§ 140までの12節の概要を節ごとに示しておく。ブリ・ボコとジュルキン集団はキー・ワードであるのでゴシック体にしてある。さらに、後続の議論に関わる重要な部分は、下線で強調しておいた。この他にも、§ 136におけるチンギスのジュルキン集団に対する非難の内容は後続の議論で重要な箇所であるので、内容ごとに（1）～（4）というように番号を振っておいた。

§ 129 : チンギス陣営とジャムカ陣営とのダラン・バルジュトにおける戦い。チンギス陣営はジャムカに「動かされて gödölgekde=jü」とあり、敗北したことがうかがわれる。

§ 130 : ジャムカを「帰らせてから qari'ul=u-at」、ウルウドのジュルチェデイ、マングトのクイルダルがそれぞれ自らの集団を引き連れてジャムカ陣営からチンギス陣営にやってくる。コンゴタン集団のモンリク・エチゲも7人の子供とジャムカ陣営から移動してくる。ジャムカ陣営から多くの人々が来たので、チンギスはホエルン夫人、カサルとともにサチャ・ベキ、タイチュとともにオナン河の森で宴会をする。この宴会で、膳手のシキウルがサチャ・ベキの庶母エベガイを始めに酒を開けたため、コリジン妃とクウルチン妃の2人がシキウルを咎め、シキウルを打ち、シキウルが大声で泣く。

§ 131 : この宴会はチンギス陣営からチンギスの異母兄弟であるベルグテイが取り仕切り、ジュルキン族側ではブリ・ポコが取り仕切っていた。チンギス陣営の馬寄場からカタギン集団の人間が馬の端綱を盗んだのをベルグテイが捕えるが、ブリ・ポコがその人間を庇う。ベルグテイが逆らおうとすると、ブリ・ポコがベルグテイの肩を剣で切りつける。ベルクテイはしかし意に介さず血を垂らしているのをチンギスは物陰に座って宴席から見ていて Činggis qahan se'üder-tür sa'u=ju qurim dotora-ča üje=jü 出てくる。ベルクテイはチンギスに「私のために兄弟で不仲にならないように、私はなんでもない、私は大丈夫です、兄弟ではじめて仲よくしているときに、兄さん、やめなさい、少し待ってください」と言う。

§ 132 : チンギスはベルグテイが諫めるにも関わらず、木の枝をへし折り、また、革袋の搔き棒を抜き取って打ち合ってジュルキン集団に勝ち、コリジン妃とクウルチン妃2人を奪い取る。しかしジュルキン集団に「仲よくしよう」と言われてコリジン妃とクウルチン妃を返してやる。このときに、金朝皇帝がタタルのメグジン・セウルト等に和議を入れられず、オンギン・チンサンがチンギス陣営に対タタル戦に加勢するように求める知らせをよこす。

§ 133 : チンギスは、タタルは祖先の人々を殺した人々なので Tatar irgen ebüges ečiges-i bara=qsat öšten irgen bü=le'e。この時に力を合わせようと、トオリル・カン（のちの王罕）に知らせをやると、トオリル・カンがこれに応じ、やって来た。チンギスとトオリル・カンはジュルキン集団のサチャ・ベキ、タイチュに同様に対タタル戦に参加するよう遣いをやるが、ジュルキン集団に来られるのを待つて六日、待ちかねて Jürkin-e irekde=qüy-eče jırqo'an üdüt güliče=jü yada=ju、チンギスとトオリル・カンの2人はオルズ河を下ってオンギン・チンサンと合流しに行く。その途中でメグジン・セウルトを殺害する。

§ 134 : オンギン・チンサンはチンギスとトオリル・カンがメグジン・セウルトを殺したこ

とを知って喜び、チンギス・カハンに「ジャウド・クリ」、トオリル・カンに「王」という名前を与える。トオリル・カンの「王罕」という名はこれに由来する。オンギン・チンサンは金朝皇帝がチンギス・カハンにさらに「招討」の名を与えるべきだと言う。オンギン・チンサンはそこから帰還し、チンギスと王罕の二人はタタルからの略奪物を分配しあい、それぞれの本拠地に帰還した。

§ 135 : タタル集団が砦を築いたナラトゥ・シトゥエンで“我らの兵士たち”が一人の幼子を見つける。チンギスはその子供をホエルン母に贈り物だと言って与え、ホエルン母は出自のよい人の子供だと言って5人の子供たちの6番目の子としてシギケン・クトゥグと名前をつけて育てた。

§ 136 : チンギスの留守陣営はカリルト湖にあったが、ジュルキン集団が50人の人々の衣服をはぎとり、10人の人々を殺した。“我々の留守陣営”にいた者がチンギスに告げると、チンギスは怒って、(1) オナン河の森で宴を催したときに料理番のシキウルをなぐったこと、(2) ベルクテイの肩を彼らが切ったこと、(3) 「仲よくしよう」と言ったのでユリジン妃とクウルチン妃の二人を返してやったこと、そして(4) 昔の仇ある、恨みのある、我々の、祖父たち、父たちを害したタタル征伐しに出馬しようと言って、ジュルキン集団を6日間待っても来なかったことを列挙したあと、チンギスはジュルキン集団に出馬した。サチャ・ベキ、タイチュは少人数で逃げたが捕えられる。チンギスは彼らの不適切な行為を咎めつつ彼らを殺した。

§ 137 : そのあと、ジュルキン集団の人々を移動させるさいに、ジャライル集団のテレゲトゥ・パヤンの子クウン・ウア、チラウン・カイチ、ジェブケ三人は彼らジュルキン集団のところにいた。グウン・ウアはムカリ、ブカ二人の子を連れて投降してきた。チラウン・カイチはトゥゲ、カシ二人の子を連れて投降してきた。ジェブケはカサルに与えた、ジェブケはジュルキン集団の居住地からボロウルという名の幼子を持ってきてホエルン母に会って与えた。

§ 138 : タタル集団の跡地から見つけたシギケン・クトゥグ (§ 135) とジュルキンの居住地から見つけたボロウル (§ 137) の二人を含む、ホエルン母の4人の育てた義理の子供たちを一纏めにして叙述されている箇所。

§ 139 : ジュルキン集団における系譜の叙述と、チンギスがこの集団を滅ぼした後に彼らの人々を自分の私民としたことが叙述されている箇所。

§ 140 : チンギスはある日、ブリ・ボコとベルグテイの二人を相撲させようと言う。ブリ・ボコは民一番の力士である。ブリ・ボコは負けない人であったが、倒れてやった。ベルグテイ

はやつとのことで押さえつけて肩をつかみ、尻の上に乗って、チラリとチンギスを見ると、チンギスは下唇を噛んだ。ベルグテイはその意味を悟って、馬乗りになって彼の背骨を折った。ブリ・ボコは、ベルグテイに負けることはないのだが、カハンを怖れて上手に倒れて致命的なことになったと言って死ぬ。

この叙述の後、ブリ・ボコの系譜が述べられ、ブリ・ボコがバルタン・バートルの子から飛び越えて、オキン・バルカクの奢りある子たちに交わることになって、ブリ・ボコはベルグテイに殺害されることになったという理由が述べられる。

3. 考察

3. 1. 第一の目的に関わる議論：ブリ・ボコがチンギスの味方であったという仮説

3. 1. 1. ブリ・ボコに言及される秘史の原文箇所の確認

栗林・确精扎布 (2001) に基づくと、ブリ・ボコは秘史において12回出現する。それを示すと、表1のようになる。表1によると、ブリ・ボコが出現するのは、巻4の§131と§140に集中している。巻4以外においては①の巻1 §50に出現している。とはいえ、この①は、巻4の§131での出来事に言及する内容である。それゆえ、ブリ・ボコについて考察するさいには、巻4のこの二つの節にもとづいておこなうのが妥当だということになる。

表1：『元朝秘史』におけるブリ・ボコ Buri_Bökö の出現箇所

番号	巻・節 (§)	四部叢刊本	出現する文脈
①	第1巻 §50	01:31:05	系譜の中で巻4 §131のことに触れられる。
②	第4巻 §131	04:08:05	ブリ・ボコがジュルキン側の宴会係であったという叙述の中で。
③	〃	04:08:08	ブリ・ボコがチンギス側の馬の端綱を盗んだ人を庇ったという叙述の中で。
④	〃	04:08:10	ブリ・ボコがチンギス側の宴会係ベルグテイの肩を切ったという叙述の中で。
⑤	〃 §140	04:26:09	チンギスがブリ・ボコとベルグテイの二人に相撲を取らせようとしたという叙述の中で。
⑥	〃	04:26:10	ブリ・ボコはジュルキンのところにいたという叙述の中で。
⑦	〃	04:27:01	⑤の相撲の取り組みでブリ・ボコがベルグテイを片手で掴んだという叙述の中で。
⑧	〃	04:27:03	ブリ・ボコは民人の力士だという叙述の中で。
⑨	〃	04:27:04	⑤と同様の内容の叙述の中で。
⑩	〃 ※	04:27:04	ブリ・ボコは負け知らずの力士であったがベルグテイに負けてやったという叙述の中で。
⑪	〃	04:28:01	ブリ・ボコがベルグテイに背骨を折られたという叙述の中で。
⑫	〃	04:29:01	⑪と同様の内容の叙述の中で。

注) ※ ⑩は⑨と同行に出現している。

3. 1. 2. ブリ・ボコがチンギスの味方であったという仮説の妥当性

表1で示したように、ブリ・ボコが何らかの物語的役割を果たしているのは、②で彼がジュ

ルキン集団側の宴会の仕切り役として登場している箇所からである。彼のおこなった行為で最も重要な行為は、④の、宴会においてチンギス側の宴会係であるベルグテイの肩を切りつけていることだろう。なぜなら、ブリ・ボコに言及される初出の①では、④のことが言及されているからである。当然ながら、ブリ・ボコはチンギス側の宴会係であるベルグテイを切りつけたのであるから、ブリ・ボコはチンギスに罰されて当然だろうと推測される。だが、実際には、ブリ・ボコへの懲罰は、宴会においてすぐになされず、ジュルキン集団が殲滅された § 139 に後続する § 140 においてなされている (⑩と⑪)。しかも、その懲罰はベルグテイと相撲をさせている最中に、チンギスがベルグテイに合図を送ることによって、ベルグテイに殺させるという形でおこなわれており、宴会でのベルグテイの恨みを晴らしてやったように示されている。

§ 140 の末尾によると、前述の要約で示したように、ブリ・ボコが殺害された理由は、ブリ・ボコがバルタン・バアトゥルの子から飛び越えて、オキン・バルカクの奢りある子たちに交わったからだということになっている。不思議なことに、この部分ではベルクテイを切りつけたからだとはなっていない。しかし、明示的な流れの中でブリ・ボコが殺害される理由を考える場合、ブリ・ボコはチンギスを裏切ったジュルキン集団側の者で、かつ、ベルグテイを切りつけたがために、ベルクテイに殺害されていると読むのが明示的に順当な理解であろう。

一方、ブリ・ボコの立場に立てば、彼がジュルキン側の者であり、しかも § 139 でジュルキン集団が殲滅されていることを考えると、§ 140 の時点において、すなわち、ブリ・ボコがチンギスにベルグテイと相撲を取るように命じられた時点で、彼は命の危険に晒されている状況にあったはずだと考えるべきであろう。にもかかわらず、ブリ・ボコはベルグテイとの試合に出場している。ブリ・ボコは身の危険を感じなかったのであろうか。ジュルキン集団が殲滅したさいに、彼は逃亡することもできたのではないか。ジュルキン集団のサチャ・ベキとタイチュは逃れている—最終的には捉えられて殺害されているが—。

ブリ・ボコのこうした行動は、次のような三通りの解釈ができるであろう。第一には、ブリ・ボコには政治的センスが全く欠けていたというものである。第二には、ブリ・ボコはジュルキン集団の正規メンバーではなかったので、ブリ・ボコはジュルキン側の宴会係をつとめたとはいえ、§ 140 で叙述されるベルグテイとの相撲の取り組みにおいて負けてやれば済むものだと油断していた可能性である—実際、彼はベルグテイに倒れてやっている—。第三の解釈として浮上するのが、ブリ・ボコがチンギスの隠された味方であったという仮説である。

本論では第三の可能性を論じる。この第三の可能性を論じることは、第一と第二の解釈を包含しうるものにもなる。むろん、チンギスの味方であったのであれば、なぜチンギスは彼を殺害したのかという疑問も同時に生じる。とくに、ブリ・ボコにはチンギスに反逆しようとした痕跡が見当たらないことを考えると、このように考えるには無理があるように思われる。しかし、ブリ・ボコは、ある重大な事柄において、チンギスの協力者であったからこそ、協力者であることが隠され、またそのために殺害された可能性がある。その重大な事柄とは、ジュルキン集団殲滅を正当化するためのチンギスの口実作りを指す。この口実作りとなった宴会におい

て、ブリ・ボコという人物は大きな役割を果たしているのである。

チンギスはジュルキン集団を § 139 において殲滅しているが、§ 136 によれば、チンギスはジュルキンを殲滅すべき理由として4つ列挙しており(2.を参照)、その4つのうち3つの事柄がチンギス陣営とジュルキン陣営の宴会におけるもめ事に関連している。明示的な流れをたどる限り、ジュルキン集団が対タタル戦に参戦しなかったことが最も重要視されてしかるべきであるのに、そのことよりも宴会でのもめ事が重視されている。

ブリ・ボコという人物は問題のこの宴会において、ジュルキン集団側の宴会係として登場している。チンギス陣営側の宴会係はチンギスの異母兄弟ベルクテイであったが、ブリ・ボコはベルクテイの肩を切りつけるという障害行為を働いている。この障害行為をチンギスは問題視していることが明示的に叙述されているが、前述したように、なぜか、チンギスはこの宴会でブリ・ボコには直接に懲罰を下してはいない。チンギスによる懲罰は、ブリ・ボコではなく、ジュルキン集団の2人の妃を奪うという形でおこなわれている—ジュルキン集団に頼まれてチンギスはこの2人の妃をジュルキン側に返している—。

ブリ・ボコの処遇については叙述がない理由のひとつは、この宴会の途中で金朝からの使者がやってきたという出来事が表向きは関係している。§ 140 でのブリ・ボコの殺害は、ブリ・ボコへの懲罰が遅れてなされた形になっているといえる。しかし、懲罰が予測されるような事態であったのであれば、§ 140 の時点で再びブリ・ボコがチンギスの前に姿を現したことが奇妙である。そもそも、宴会の途中で金朝の使者が来訪したために中断されたとしても、前述のように、その来訪の前にチンギスがジュルキン集団の2人の妃を奪い取っていることをみれば、チンギスがブリ・ボコを罰していないのは単に失念していたわけではないことを示している。つまり、ブリ・ボコに対する懲罰がなぜなされなかったのかという理由は、明示的には理解できない。

以上のように、チンギスはブリ・ボコに対して不可解な対応をしている。ここでしかし、ブリ・ボコがチンギスの協力者であったという仮説に基づくと、ブリ・ボコがベルクテイの肩に切りつけたという行為は (§ 131)、突発的な出来事ではなく、ブリ・ボコがチンギスに、そうするように指示されていたということになる。彼がベルクテイを切り付けるという叙述箇所をよく観察すると、チンギスが「物陰に座って宴席の中から見て Činggis qahan se'üder-tür sa'u-ju qurim dотора-ča üje-jü」いるとある。これは、指示通りにブリ・ボコがベルクテイに危害を加えるか否かをチンギスが監視していたことを暗示している。

一方、切りつけられたベルクテイにしても、チンギスの義兄弟であるので、チンギス側の宴会係はチンギスの指名によるものであることは疑いない。むしろ、切りつけられたベルクテイはブリ・ボコがチンギスの協力者であるとは知らされていなかった—だからこそ切りつけられたのである—。切りつけられても、ベルクテイは次のように言って、チンギスを諫める (§ 131)。

mer üdü'üi bü=le'e.min=u tula aqa de'ü-tür mawuqali=n bolulča=ujai. bi ülü alja-qu bi ila'ari büy=yü. aqa

de'ü-tür sayi ijilidülče-n bü-küi-tür aqa bü-tügei qurumut bayyi=(栗林・确精扎布編 2001:164)傷はどうということはないです。私のために兄弟で不仲にならないように。私は何でもない。私は大丈夫です。兄弟で初めて親しみ合っている時に、兄さん、やめなさい、少し待ってください (小沢 1986:38)。

しかしこれに対してチンギス・カハンの態度は次のように記されている (§132)。

Činggis_qahan Belgütei tedüi itqa-asu ülü bol=u-n modun=u geši-üt ququru tatala-ju itüges-ün büle'üt suquči=ju a[b]=ču ašgilaldu=ju Jürkin-i ilaq=ču Qoriġin_qadun Qu'určın_qadun ġirin-i buli=ju ab=u-bai(栗林・确精扎布編 2001:164)。

チンギス・カハンはベルグテイがそれほど諫め進めたのだが肯じないで木の枝々をへし折り、皮袋の搔き棒を抜き取り打ち合っ、ジュルキンを打ち負かし、コリジン妃、クウルチン妃二人を奪い取った (小沢 1986:52)。

ここで、ベルグテイが肩を切り付けられても、それを大きな事柄にしなかったのはなぜなのか。この背景にはベルクテイの母の出自がタタルであったことと関係しているように思われる (藤井 2009, 2010 a)。なぜなら、ジュルキン集団がチンギスの兄弟集団でありながら敵対集団としてみなされていることは、モンゴルにとってタタル集団が姻族集団であったにも関わらず敵対集団としてみなされたことと類似しているからである。すなわち、ベルグテイはチンギス陣営に下って来たジュルキン集団に対して同情的だったということである。

しかし、チンギスがジュルキン集団に革袋の搔き棒を抜き取って打ち合いをしたことをみると、ベルグテイのジュルキン集団に対する同情はチンギスにとって都合が悪かったと考えられる。チンギスは事を荒立て、ジュルキン集団を責めることが目的だったのであろう。それゆえ、この切りつけ事件をブリ・ボコに起こさせる手前の §130 において、酒の注ぐ順番でのめ事を起こさせたのもチンギス本人とみる可能性が高い。チンギス陣営のシキウル膳手は、ジュルキン集団のサチャ・ベキの庶母エベゲイを始めにして酒を注いだため、ジュルキン集団の正妻筋のコリジン妃とクウルチン妃が異を唱えシキウルを打ち据える。シキウルの給仕の仕方は予めチンギスから、直接にせよ間接にせよ、そうするように指示を受けていたと考えることができる。むろん正妻筋のコリジン妃やクウルチン妃たちが非正妻であるエベゲイを認めていなかったし、彼女たちよりも高位に置くことに異議を唱えるだろうこともチンギスは予測していたのであろう。ただし、コリジン妃とクウルチン妃のどちらが正妻かは秘史では不明である。

いずれにせよ、ベルクテイが危害を受けたことを理由にチンギスがコリジン妃やクウルチン妃を奪うことは、最初から計画の中に入っていたものと考えられる。その計画の中には、彼女たちを奪った後に、ジュルキン集団に返すことによってジュルキン集団に恩を売ることまでも含んでいたのであろう。ブリ・ボコがジュルキン殲滅までチンギスの味方でありながらジュ

ルキン集団のもとにいたとすれば、彼はチンギスの命令によってジュルキンに潜入していた諜報員であったことを意味している。とすると、ジュルキン集団を殲滅するために送り込まれた諜報員であったブリ・ボコはジュルキン殲滅後に単に不要な存在になっただけでなく、口封じのために消されたことになる。チンギスにとってそれほどジュルキン集団を抹殺することは必要だったらしい。以下においては、これについて考察したい。

3. 2. 第二の目的に関わる議論：ジュルキン集団殲滅の非明示的論理

ブリ・ボコがジュルキン集団に送り込まれたチンギスの諜報員であるとする、チンギスは宴会の揉め事がなくとも、タタル戦に彼らが参加せずとも、ジュルキンを抹殺するつもりであったことを暗示している。以下においては、このことについて考察することにしたい。

3. 2. 1. ジュルキン集団に言及している秘史の箇所の確認

秘史においてジュルキン集団に言及している箇所を栗林・碩精扎布（2001）に基づいて出現順に記載すると表2の23例となる。表2の括弧内の数字は語尾が同一のもの数でありその初出箇所であることを示している。ジュルキン集団の初出は①の第3巻の§122であるが、ここでは、サチャ・ベキ、タイチュがジュルキン集団のリーダーであることが示されている。このサチャ・ベキとタイチュは、巻4の§136でチンギスを裏切ったかどで殺害されている。ブリ・ボコがどのように関係しているかを表2に基づいてみると、③と④に登場していることが判明する。①がジュルキンのいわば紹介ともいべき箇所であり、②はすでに宴会の内容に入っていること、そして④がジュルキンに言及される最後の箇所であることを考えると、ブリ・ボコの出現箇所はジュルキン集団について言及されている箇所と重なっている。こうした重複をみても、ブリ・ボコがジュルキン集団に潜入していた諜報員であったという仮説に符合している。

表2：『元朝秘史』における Jurkin の出現箇所

番号	形態	巻・節 (§)	四部叢刊本	出現する文脈
①	Jürkin-ü (6)	第3巻 §122	03:41:07	ジュルキン集団のソルカト・ジュルキの息子であるサチャ・ベキ、タイチュがチンギス陣営に移動してきたという叙述の中で。
②	Jürkin-ü	第4巻 §130	04:06:07	チンギス、ホエルン夫人、ガサルがジュルキン集団のサチャ・ベキ、タイチュとオナン河の森で宴会をしようと言ったという叙述の中で。
③	Jürkin-eče (1)	” §131	04:08:05	ブリ・ボコがジュルキン側の宴会係であったという叙述の中で。
④	Jürkin-i (3)	” §132	04:10:06	チンギスがジュルキンのコリジン妃とクウルチン妃を奪ったという叙述の中で。

⑤	Jürkin-ü	” § 133	04:13:02	チンギスとトオリルの二人がジュルキンのサチャ・ベキ、タイチュに対タタル戦に参加するように言う会話の中で。
⑥	Jürkin-e (3)	”	04:13:03	⑤と同箇所。
⑦	Jürkin-e	”	04:13:06	チンギスがジュルキンに来られるのを6日間待ったが来なかったという叙述の中で。
⑧	Jürkin (5)	” § 136	04:18:03	ジュルキン集団がチンギスの留守中にチンギス側の50人の民の服をはぎ取ったという叙述の中で。
⑨	Jürkin-e	”	04:18:05	⑧と同内容をチンギス陣営の者が言ったという叙述の中で。
⑩	Jürkin-ne (1)	”	04:18:08	⑧と同内容をチンギス自身が言ったという叙述の中で。
⑪	Jürkin-i	”	04:19:05	⑦と同内容をチンギス自身が言ったという叙述の中で。
⑫	Jürkin-tür (3)	”	04:19:08	チンギスがジュルキンに出撃したという叙述の中で。
⑬	Jürkin-i	”	04:19:08	ジュルキンをケルレン川のコデエ・アラルのドローン・ボルダウトにいるときに略奪したという叙述の中で。
⑭	Jürkin-ü	” § 137	04:21:08	サチャ、タイチュの二人を殺害して、チンギスがジュルキン集団を移動させようとしたという叙述の中で。
⑮	Jürkin-tür	”	04:21:10	ジュルキンのもとにジャライルの者がいたという叙述の中で。
⑯	Jürkin-ü	”	04:23:04	ジェブケがジュルキンの営地でボロウルという名の幼子を拾ったという叙述の中で。
⑰	Jürkin-ü	” § 138	04:24:06	⑮と同内容。
⑱	Jürkin_irgen-ü (1)	” § 139	04:25:03	ジュルキン集団の由来を述べる叙述の中で。
⑲	Jürkin	”	04:25:03	⑱と同内容の叙述の中で。
⑳	Jürkin	”	04:25:05	⑱と同内容の叙述の中で。
㉑	Jürkin	”	04:26:01	⑱と同内容の叙述の中で。
㉒	Jürkin	”	04:26:03	⑱と同内容の叙述の中で。
㉓	Jürkin-tür	” § 140	04:26:10	ブリ・ボコがジュルキン集団のところにいたという叙述の中で。

3. 2. 2. 対タタル戦に反対であったジュルキン集団

ブリ・ボコがチンギスによってジュルキン集団に送り込まれた諜報員であったとすると、宴会の揉め事はすべてチンギスが仕組んだ演出（芝居）ということになる。こうした演出がなぜ必要だったのかは、この宴会が金朝のタタル征伐要請によって中断されている点に重要な手がか

りがある(2. の §132 を参照)。中断は一見、偶然のように叙述されているが、そうではないと考える。なぜなら、タタルを挟み撃ちにしようという金朝の要請にジュルキン集団は呼応しないはずだとチンギスは予想していたものと推測されるからである。そこには、ジュルキンのそうした対応を非難できない隠された事情があり、対タタル戦に参加しないということだけでジュルキンを征伐する正当性を得ることができなかつたのである。タタル集団が敵となったのはアムバガイというカハンが殺された事件と関係しているが、そもそも、アムバガイは明示的にも最終的に金朝に処刑されているので(巻1 §53)、金朝こそ敵であり、その金朝と共謀して同族を征伐するというのは理屈に合わないはずなのである。

その敵である金朝にチンギスはなぜ呼応したのであろうか。チンギスが金朝と懇意になったという内容は、この金朝の要請に言及される §132 まで一度も現れない。しかも、ここでは、単なる懇意ではなく、金朝のメグジン・セウルトが、§134 で称号を与えている叙述からみて、明らかにチンギス陣営よりも優位に立っていることに注目すべきである。つまり、いつの間にか、チンギス陣営は、金朝の配下的存在になっているかのような叙述になっているのである。明示的に叙述されていなくとも、このような事態になった秘史の叙述箇所としては、§129 と §130 の間以外にないことは明らかである(2. の当該箇所を参照)。

§129 は、チンギス陣営とジャムカ陣営の間における初めての対戦ダラン・バルジュトの戦いが叙述されている部分であるが、ここでチンギス・カハンはジャムカに「動かされて gödölgekde-jü」と叙述されており、この戦いに敗北を喫したことが暗示されている。にもかかわらず、§130 の冒頭には、「こうして、ジャムカをそこから帰らせてから *tende Jamqa-i tende-če qari'ul=u=at*」というチンギス陣営があたかもジャムカ陣営よりも優位に立っているかのような使役表現が観察される。しかも、ジャムカ陣営に打ち負かされたいチンギス陣営に、ウルウド集団のジュルチェデイ、マンガト集団のクイルダル、そしてムンリク・エチゲがジャムカのもとから離れて合流している。

§129 におけるチンギスのジャムカに対する敗北の暗示、§130 の冒頭のチンギス陣営のジャムカ陣営への優位の表現の存在、同じく §130 におけるジャムカ陣営に負けたはずのチンギス陣営への諸集団の移動、そして §132 における、チンギスに対する突然の対タタル戦参加への金朝の要請という四つの内容は、あることを指し示すに充分である。それは、チンギス陣営が、ジャムカ陣営との戦いに負けた後、金朝の配下に入ったということである。金朝という配下に入ったということは、金朝の庇護を受けられるということでもある。負けたチンギス陣営に集団が移動している理由は、こうした金朝という後ろ盾をチンギス陣営が得たことと関係があるものとみられる。チンギスが、本来なら敵である金朝の要請に応えたのは、実際には、支配者側からの命令であったということになる。

それゆえ、宴会の途中で金朝からの要請があったとあるが、宴会よりも前にチンギスはこの金朝の要請を受けていた可能性も否定できない。チンギスはジュルキン集団が対タタル戦に参加することはないと推測していたため、ジュルキンをモンゴルの和を乱す集団として位置づけ

ることにより、ジュルキン集団を排除・殲滅する方針を立てたのではなかろうか。対タタル戦に参加しないことでジュルキン集団を責めることができないことがわかっていたため、宴会におけるジュルキンの不適切な行為が必要とされたということになる。

ジュルキンが対タタル戦に参加しないことだけで十分に彼らの行動に非があるように見えるのは、アムバガイ・カハンの殺害された顛末の明示的な叙述に影響されているからであって、もしアムバガイ・カハンの殺害に藤井（2015）で論じたようなクトウラの陰謀を考慮に入れると、タタル集団を純粋に敵とするのは無理である。タタル集団はイエスゲイを殺害したのでイエスゲイの息子であるチンギスにとっては宿敵ではあったかもしれないが、イエスゲイはモンゴル全体を支配するカハンではなかった。これに対して、アムバガイはカハンであり、彼を処刑したのは金朝であるから、ジュルキン集団にとっては、モンゴルの敵はタタルではなく、金朝なのである。その敵の金朝に加担してタタル集団を討つというのは、ジュルキン集団には意味不明のことであった。彼らの立場を考えれば、ジュルキン集団がチンギスに同調して対タタル戦に参加しなかったのは当然なのである。

以上のことを考慮に入れると、宴会のもめ事が重視される背景には、タタルを宿敵とする考え方はジュルキン集団には通用しなかったことがある。それゆえ、宴会におけるもめ事は些細な事柄のように見えながら、実際には必須であったのである。ただ、ここで注意が必要なのは、対タタル観の違いが単なる政治的な方針の違いではないことである。それは、誰がカブル・カハンの正統な後継者ラインなのかという問題と関わっている。ジュルキン集団は、図1で示したように、カブル・カハンの長子オキン・バルカクの子孫なのに対し、チンギスは次子バルタン・バアトゥルの子孫である。そして、ジュルキン集団の祖は実質上ソルカト・ジュルキで、しかも、チンギスの父イエスゲイ・バアトゥルと同時代人であるから、秘史の叙述から推論すれば、ジュルキン集団はイエスゲイに対立する政治勢力としてその他の集団から分岐した可能性が高い。その分岐の理由を考えると、拙論で論じたようなアムバガイ事件の真相と無関係とは考えられない—少なくとも秘史の論理からみれば—（藤井 2015：11—32）。

詳細はアムバガイ事件を考察した拙論を参照されたいが、重要な点を述べておくと、次のようになる。まず、アムバガイが「タタルの虜の民」に捕らえられ金朝で殺害された事件の裏幕として挙げられるべき人物は、アムバガイの後継者カハンとなったクトウラである。アムバガイの遺志により、タタルはその後「モンゴルの敵」となったが、実際には、アムバガイの遺志を引き継いだイエスゲイにより、集団の分裂を避けるために、タタルは強制的に敵にさせられたといえる。秘史の非明示的な見解に基づくならば、カブル・カハンの第4子クトウラ・カハンの系譜—ブリ・ボコの父クトウグル・モンゴールの弟の系譜—も、チンギスの父イエスゲイの系譜—すなわちカブル・カハンの第2子バルタン・バアトゥルの系譜—も、どちらもカハン位にふさわしくない。そうした中で、カブル・カハンの継承ラインとして重要な位置を占めるのが、カブル・カハンの長子オキン・バルカクの系譜である（図1）。それゆえ、チンギスは、この集団を抹殺せねばならなかったのだと考えられる。

これを傍証しているのは、§ 133 において、チンギス軍が6日間ジュルキンを待ったという叙述である。原文では、*Jürkin-e irekde-qiy-eče jırqo'an üdüt güliche=ju yada=ju* (ジュルキンに来られるのを6日間待ちあぐねて)とあり、受動態が用いられている点が重要である¹。明示的にはチンギスはジュルキン集団を待っているように見せているが、非明示的には、ジュルキンに来てもらってはジュルキン集団に落ち度がなくなるので困ることを示した箇所であるといえる。

3. 2. 3. チンギスの留守陣営を襲撃した事件

ところで、ジュルキン集団を殲滅する理由として一応理由には挙がっているものの、重視されていないように思われる出来事は、チンギスが対タタル戦に出撃した留守陣営をジュルキン集団が襲ったという出来事である (§ 136)。これはなぜなのであろうか。以下、これについて考えてみたい。

前述のように、チンギス陣営は、ジュルキン集団が来ないようにと六日間待っていたわけであるが、その六日間、ジュルキン集団が何をしていたかといえば、五十人の者の衣服を剥ぎ取り、十人を殺害する行為をおこなっていた (§ 136)。ジュルキンに入ったブリ・ボコがチンギスの諜報員であったという仮説に基づけば、明示的にはサチャ・ベキとタイチュが関わったように書かれているが、この事件もブリ・ボコが関与した可能性を否定できない。なぜなら、そうではなかった場合、ジュルキン集団は何のためにこうした行為をおこなったかが不明だからである。金朝とチンギス軍と一緒にタタルを挟み撃ちにするという状況からみて、この対タタル戦でチンギスが敗北することはなかった可能性が高い。とすると、チンギス陣営の本隊が対タタル戦から戻った後に、こうしたジュルキン集団の行為にチンギスが処罰を与えることはジュルキンにも自明であったはずである。チンギスが対タタル戦にジュルキン集団は参加しないことを予想していたこと、また、宴会における前述のようなチンギスの演出力を考えると、チンギスがジュルキン集団に不適切な行為をさせるという計画を立てていた可能性は高い。

ここで注目すべきことは、被害にあったチンギス陣営の中に、秘史の「語り手」が含まれていたことがうかがわれることである(藤井 2011b)。秘史の「語り手」の存在を暗示する、地の文における一人称複数形の“我々”表現の考察に拠ると、「語り手」が他の集団に対しては一定の同情を示しつつも、ジュルキン集団に対してだけはそうした同情が見られないことから、このジュルキン集団の襲撃において「語り手」は命の危険に直面したのかもしれない(藤井 2011b : 52)。

ただし、この部分については別の解釈もできる。それは、襲撃された人々が女性だったという可能性である。襲撃されたのが対タタル戦に出陣せず留守陣営に残っていた人々であったことをみると、その多くは女性だったと考えるのが妥当であろう。とすると、「衣服を剥ぎ取る」という表現はジュルキンによる強姦事件を示していることになる。チンギスが自分の陣営の女性をあえて襲撃させることはありえないように思われるかもしれない。しかし、チンギスが女

性を時として政争の道具として用いることは既に論じてきたので、ありえなくはないと言わざるを得ない。この場合、「語り手」は現場にいなかったこともありうるが、在不在に関わらず、秘史の「語り手」が女性に同情的であったことを考えると、「語り手」はこの出来事を我が事のように感じ心を痛めたのであろう。ちなみに、上記の二つの解釈は両立しうるものでもある。

この襲撃事件がチンギスの演出であったとすれば、ジュルキンを殲滅する口実としてチンギスがこの事件のことを前面に押し出していないのも納得できるものとなる。

3. 2. 4. 宴会の揉め事が示す非明示的意味

次に、宴会のもめ事がジュルキン殲滅の理由としていかに重要なものであったかを示すことにしたい。§ 136によると(2. の該当箇所を参照)、チンギスがジュルキン集団を問題視した宴会における揉め事とは、(1) オナン河の森で宴を催したときに料理番のシキウルをなぐったこと、(2) (彼らが) ベルクテイの肩を切ったこと、(3) ジュルキン集団が「仲よくしよう」と言ったのでコリジン妃とクウルチン妃の二人を返してやったこと、の3件である。以下、一つずつ述べよう。

(1) の件は§ 130 で叙述されている。シキウルの件は、シキウルが庶母であるエベゲイに最初に酒を注いだことが発端となっていることに着目すべきである。ジュルキン集団のリーダーがサチャ・ベキ、タイチュであったため、その母であるエベゲイに敬意が払われたということである。しかし、このことは、ジュルキン集団の正妻筋にとっては秩序を乱す行為であった。彼らのシキウルへの仕打ちは彼女たちにとっては当然の行為だったということになる。

シキウルが泣きながらもネクン・タイシとイエスゲイ・バアトゥルがいたらこんなことにはならなかったと言う意味は重要である。なぜなら、ネクン・タイシとイエスゲイ・バアトゥルは兄弟であるが、彼らはメルキトに嫁ごうとしていたチンギスの母ホエルンを略奪してイエスゲイが第一夫人である「ベルグテイの母」を第二夫人にし、ホエルンを第一夫人である正妻にすげ替えたからである(藤井 2011 a)。シキウルの言葉は、かつてのネクン・タイシとイエスゲイ・バアトゥルのホエルン略奪事件を強く匂わせる。3. 1. で述べたように、このシキウルの行為はチンギスの演出によるものであるが、その意図は、非正妻であってもサチャ・ベキやタイチュの母に敬意を示すことがチンギスの出自を非明示的に肯定することにあると考えられる。

(2) の、ジュルキン集団がベルグテイの肩を切ったのは、3. 1. において論じたように、チンギスが諜報員であるブリ・ボコに指示していたからである。ここで、特筆すべきことは、宴会のさいにチンギス側の仕切り役として異母兄弟であるベルグテイが抜擢されている点である。ベルグテイは偶然ではなく、必然的に抜擢されたのではないかと推測される。なぜなら、ベルグテイの母はタタル出身者であるため(藤井 2009, 2010 a)、ベルグテイという存在には常にタタルの影がつきまとうからである。チンギスは、ブリ・ボコにベルグテイの肩を切らせる行為によって、タタルの隠喩であるベルグテイにブリ・ボコが敵であることを示し、ベルグテイに最終的にブリ・ボコの背骨を折らせることによってジュルキン集団の隠喩であるブリ・ボコにベル

グテイが敵であることを示そうとしたのではないかと疑われるのである。

(3) の件では、チンギスはコリジン后とクウルチン后をジュルキン集団に返してやった恩に言及しているが、§ 130 においては、そもそもチンギスが彼女たちを先に奪っているのである。この部分の非明示的意味として考えられることは、ひとつには、メルキト集団が「ベルグテイの母」やボルテ夫人を奪ったのに彼女たちを返さなかったことに対するメルキト批判が暗に込められていることである—ただしボルテ夫人を見放したのはチンギスの計画にあった可能性についてはすでに論じたとおりである—(藤井 2014b)。メルキト批判は、タタル集団の影を帯びるベルグテイを味方につけるために必要なことである。もうひとつには、チンギスがいつも簡単に女性を政争の道具にするという点であろう。

以上をまとめると、(1) はタタル集団を敵視して成立したチンギスの出自を肯定し、(2) は(1) とも関連する、タタル集団がジュルキン集団にとっても敵対していることを示そうとし、(3) においては、(2) のタタル集団の影を帯びているベルグテイではあるが、対メルキトに対しては共通した立場であることを示すことにより、ベルグテイをチンギス陣営につなぎとめようとする非明示的意味が存在しているということになる。

4. 非明示的な観点からみた明示的な流れ

以上の考察をもとに、2. において示した要約を非明示的な観点から再度読み解いてみたい。紙幅の都合上、明示的意味は割愛するので、2. における明示的意味を適宜参照されたい。ただし、非明示的な意味が未解決である § 135、§ 137、§ 138 についてはここでは触れない。

§ 129 : チンギス陣営はジャムカに敗北を喫した。

§ 130 : チンギス陣営はジャムカに負けた後、金朝の傘下に入ったので、金朝の威を借りて、ジャムカ陣営から多くの人々がチンギス陣営に移動してきた。チンギス陣営は、そのように移動してきたジュルキン集団のリーダーたちであるサチャ・ベキ、タイチュらと親善のための宴会をおこなった。宴会では、チンギスに命じられたように、膳手のシキウルがサチャ・ベキの庶母であるエベゲイに最初に酒を注ぐ。チンギスの予期したとおり、正妻筋のコリジン后とクウルチン後の二人がシキウルを咎め、シキウルを打ちすえた。シキウルは「ネクン・タイシとイエスガイ・バアトゥルがいたら、こんな目には遭わなかった」と泣く。シキウルは、チンギスに命じられたとおりに号泣し、宴会の雰囲気悪くする。

§ 131 : チンギスは、金朝側からタタル集団を挟み撃ちしようともちかけられていたが、ジュルキン集団がその戦争に加わるとは思っていなかった。そこで、諜報員のブリ・ボコにハタギン集団の人にチンギス陣営の馬繋ぎにつないであつた馬の端綱をベルグテイに気づかれるように盗ませて、ベルグテイの前でその人間を庇わせた。ベルグテイはそれに反発すると、ブリ・ボコ

はチンギスに命じられていたとおり、ベルグテイの肩を切りつける。チンギスは、ブリ・ボコが命じたように動くかどうかを物陰に座って観察していた。ブリ・ボコが命じたとおりにベルグテイの肩を切りつけたのをみると、宴席から出てきて、ジュルキン集団に怒る。ベルグテイはチンギスに対抗心を燃やしていたので、この争いを阻止しようとする（藤井 2011 a）。

§ 132 : チンギスはベルグテイが諫めるのを敢えて無視し、ジュルキン集団のコリジン后とクウルチン后を奪う。チンギスの予想通りに、ジュルキン族が和を求めてきたので、彼女たちを返してやり恩を着せる。このときに、金朝の使者がきて対タタル戦を一緒に闘おうと持ちかけてきたという叙述がなされる。すでに、使者が来てそのような提案をされていたのであるが、宴会におけるチンギス陣営とジュルキン集団の不和はチンギスがジュルキンを滅ぼす口実として不可欠であった。

§ 133 : チンギスは金朝に要請された対タタル戦にケレイト集団のトオリル・カン（王罕）を参加させようとし、彼はチンギスのもとにやってくるが、ジュルキン集団のサチャ・ベキやタイチュは6日間待っても応じない。ジュルキン集団にとっての敵は金朝であって、タタルは関係なかったので、参加するつもりはなかった。チンギスは対タタル戦において金朝側の武将として大いに活躍し、タタル集団のメグジン・セウルトを殺害する。

§ 134 : 金朝の宰相であるオンギン・チンサンはチンギスとトオリル・カンにそれぞれ称号を与える。ケレイトのトオリル・カンはこの称号をそのまま自分の称号として使うようになるが、チンギスがこれを使わなかったことを見ると、チンギスは、金朝の支配下にあるとはいえ、金朝の支配下にいるという自覚はあまりなく、一時的なことであったと考えていたことがうかがわれる。

（§ 135 は省略）

§ 136 : チンギスが対タタル戦に出陣しているあいだ、チンギスは、ブリ・ボコより厳密にはブリ・ボコを中心とする人々に、チンギス陣営の留守を襲撃させる。

（§ 137 と § 138 は省略）

§ 139 : ジュルキン集団における系譜の叙述と、チンギスがこの集団を滅ぼした後に彼らの人々を自分の私民となしたという箇所、チンギスはジュルキン集団をすべて抹殺したわけではなく、再統合したことになる。

§ 140 : ジュルキン集団を降したあと、チンギスはジュルキン集団に潜入させていたブリ・ボコをベルグテイと相撲をさせる。ブリ・ボコはチンギスに裏切られるとは思っていなかったため、気を利かせてベルグテイに負けてやったが、チンギスにとってはブリ・ボコは用済みの存在であり、かつ、事件の真相を漏らされては困る存在であったので、ベルグテイを利用してブリ・ボコを殺害した。この叙述のあと、ブリ・ボコの系譜が述べられ、ブリ・ボコがバルタン・バアトゥルの子から飛び越えて、オキン・バルカクの奢れる子達と交わることになって、ブリ・ボコはベルグテイに殺害されることになったという理由が述べられる。非明示的には、ブリ・ボコはバルタン・バアトゥルの息子イエスゲイ・バアトゥルの息子であるチンギスの諜報活動をしていたのであるから、明示的に叙述されている内容は明らかに非明示的な内容に抵触する。しかし、ブリ・ボコがもしジュルキン集団のなかに潜入した諜報員ではない形でバルタン・バアトゥルの子供たちであるチンギス陣営にいたとしたら、ブリ・ボコは殺されることはなかったともいえる。それゆえ、ブリ・ボコがバルタン・バアトゥルの子から飛び越えて、オキン・バルカクの奢れる子達と交わることになって、ブリ・ボコはベルグテイに殺害されることになったという明示的叙述は、逆説的ではあるが、間違っていないのである。

以上、非明示的な観点から、明示的に示した要約の内容を読み直してみた。

5. 結論とその副産物、そして今後の課題

5. 1. 結論

本論における目的には二つあった。ひとつは、ブリ・ボコがチンギス・カンの味方であったという仮説の妥当性を論じることである。もうひとつは、ジュルキン集団を殲滅するための論理として、なぜジュルキン集団が対タタル戦において参加しなかったことだけでは足りず、対タタル戦の前に、宴会の揉め事がジュルキン殲滅に必要であったのかという疑問を解くことであった。最初の仮説の妥当性については、ブリ・ボコは秘史において明示的には一貫して、ジュルキン集団側の人間として描かれているのであるが、ジュルキン集団の人間であるにも関わらず、ジュルキン集団が滅亡させられたあとに、チンギスの命令でベルグテイと相撲を取りに現われるという不可解な行動をとっていることを指摘し、このような行動が仮説に基づくと了解可能なものになることを示した。

第二の疑問については、まず、ジュルキン集団の対タタル観がチンギス陣営とは異なるものであったことを指摘した。とくに、藤井 (2014) を土台にしながら、タタル集団を敵とする見方が「モンゴル」の分裂を回避するためにアムバガイ・カハンの遺志によって作られた“創られた伝統”であることを確認した。ただし、イエスゲイ自身は自業自得とはいえ、タタル集団に毒殺されたため、チンギスにとっては直接的な敵となった。そのため、ジュルキン集団を抹殺するためには、対タタル戦に参加しなかったことだけでは足りなかったため、宴会での揉め事が必要とされたということになる。宴会での揉め事は、チンギスが自らすべて演出したものであり、揉め事は自然発生的なものではなかった。そして、宴会での揉め事の一々は非明示的

な意味を持っており、すべてチンギスを正当化している内容になっていることを示した。

5. 2. 本論の副産物

以上、論じてきたように、巻4 §130～§132で示されたチンギス陣営とジュルキン集団との親睦のための宴会において、チンギスはジュルキン集団を征伐するための口実作りのために、悶着を起こさせようと最初からもくろんでいた。そこにおいては、チンギス陣営の膳手シキウルが、正妻筋の後たちではなく、サチャ・ベキの庶母エベゲイに先に酒を注がせて正妻筋の後たちを怒らせたのも、ジュルキン集団側の宴会係であるブリ・ボコにベルグテイの肩を切り付けさせたのも、ジュルキン集団の正妻筋のふたりの后を奪った上で返したのも、すべてチンギスの“演出”（芝居）であったということになる。

こうしたチンギスの演出力に基づくと、藤井（2014b）で論じた秘史のボルテ夫人事件において謎のままになっていた疑問を解くことができる。それは、チンギスがボルテ夫人を奪わせるさいに、その相手がメルキトであったかどうかを予期していたのか否かという疑問であった。ブリ・ボコ事件におけるチンギスにおける念入りな演出をみれば、チンギスはもちろんメルキト集団がボルテ夫人を奪うことを知っていただけでなく、そのように画策した可能性が高いとみてよいであろう。すなわち、ボルテ夫人を奪わせるように、チンギスその人あるいはチンギスの命令を受けた誰かがメルキト集団に挑発していた可能性が浮かび上がるのである。

5. 3. 今後の課題

以上、チンギス・カハンがジュルキン集団を降す考察に必要だと考えられる巻4 §129～§140までを対象に考察をおこなってきた。4. においてはブリ・ボコがチンギスの諜報員であるという仮説から当該箇所を読み直してみた。論理的な流れにおいて齟齬は見られないことから、この仮説の妥当性は提示しえたと考える。ただし、この箇所において登場する明示的内容がどのような非明示的意味を帯びているのかは不明な部分がある²。そのような部分は大きく次の二点である。

(1) 4. で示したように、本論での考察の枠からはみ出た §135、§137、§138 である。これらはすべて拾い子に関わる叙述であるが、この叙述がここに挿入されている意味。

(2) §133・§134 において、ケレイトのトオリル・カンがどのような状況で対タタル戦にチンギスと共に合流したのかが不明であること。3. 2. 2. で述べたように、チンギス陣営が、ジャムカ陣営との戦いに負けた後、金朝の配下に入ったという事態は、藤井（2014a）で論じたこととどのような関係にあるのかが不明である。

以上の二点は今後の課題としたいが、最後に、本論と直接関連する、ある重要なことを指摘しておきたい。それは、ブリ・ボコがチンギスによって殺害された §140 の直後の §141 においてアンチ・チンギス同盟が結成されていることである。すなわち、この動きは、本論を敷衍すれば、ジュルキン集団を殲滅するためのチンギスの一連の演出に憤りを感じる草原勇者がい

たことを示唆している。このアンチ・チンギス同盟のリーダーこそ、ジャムカであり、秘史の「語り手」がこの人物に心酔していたことについては既に論じたとおりである(藤井 2011b)。

引用文献

〈邦文〉

- 小沢重男 (1986) 『元朝秘史全訳 (下)』 風間書房
- 栗林均・碓精扎布編 (2001) 『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』、東北アジア研究センター叢書第4号, 東北アジア研究センター
- 藤井麻湖 (2001) 『伝承の喪失と構造分析の行方―モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』 日本エディタースクール出版部
- 藤井真湖 (2009) 「チンギス・カンをめぐる伝説の諸相―『チンギス・カンの伝説と歴史の地』という小冊子をもとに―」 『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』 第10号, pp.41-56.
- 藤井真湖 (2010a) 「『元朝秘史』第53節～第68節の有機的解釈の試み―“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに―」 『言語文化学会論集』 第34号, pp.167-179.
- 藤井真湖 (2010b) 「『元朝秘史』第268節におけるイエスイ妃に関する叙述―グルベルジン・ゴア妃の伝説からみた解釈―」 『現代社会研究科研究報告』 第5号, pp.41-56.
- 藤井真湖 (2011a) 「『元朝秘史』におけるベクテル、ベルグテイ、“ベルグテイの母”の考察―“ベルグテイの母”の出身仮説をもとに―」 『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』 6号, pp.21-41.
- 藤井真湖 (2011b) 「『元朝秘史』の地の文における“我々”表現に隠された意図―巻3第110節～巻11第263節における一人称複数形についての考察―」 『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』 7号, pp.45-66.
- 藤井真湖 (2013a) Чингис Хаан Ба Монголын Эзэнт Гүрэн:Түүх,Соёл,Өв (Олон Улсын Эрдэм Шинжилгээний V Хурал 2012.07.24-26. Улаанбаатар хот), Редактор: Д.Шүрхүү, Б.Хүсэл, Иманиши Жүнко, Б.Сэржав, Орчуулгын редактор: Б. Сэржав, Хэвлэлд бэлтгэсэн: А. Сосорбурам, М. Болормаа, pp.112-140.
- 藤井真湖 (2013b) 「『元朝秘史』におけるソルカン・シラとジェベ―gelbüre kö' ün=「語り手」の仮説をもとに―」 『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』 第9号, pp. 17-34.
- 藤井真湖 (2013c) 「『元朝秘史』の“モンゴル英湯叙事詩”的研究―現代に残る伝説から『元朝秘史』の物語分析へ―」 『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 第15号, pp.43-70.
- 藤井真湖 (2014a) 「『元朝秘史』における anda 概念―王罕・ジャムカ・チンギスの非明示的な三者関係を基に―」 『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』 第10号, pp.47-72.
- 藤井真湖 (2014b) 「『元朝秘史』におけるボルテ夫人事件―繰り返し現れる“略奪”と“奪還”の諸事件のクライマックスとして―」 『愛知淑徳大学論集―グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科編』 第6号, pp.39-54.

コミュニケーション研究科編』第6号, pp.39—54.

藤井真湖 (2015) 「『元朝秘史』におけるアムバガイ事件—クトゥラ関与の仮説に基づいて—」『愛知淑徳大学論集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科編』第7号, pp.11—32.

村上正二 (1970) 『モンゴル秘史1 チンギス・カン物語』東洋文庫。

《蒙文》

Čeringsodnam, Dalangtai. (1993) 《Mongyol-un niyuča tobčiyān》—u orčiyulya tayilburi,民族出版社, 北京。

《欧文》

Cleaves, Francis Woodman (1982) *The Secret History of the Mongols: For the First Time Done into English out of the Original Tongue and Provided with an Exegetical Commentary, Volume 1*, Published for the Harvard-Yenching Institute by Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, London, England.

de Rachewiltz, Igor (2004) *The Secret History of the Mongols, Volume One*, BRILL, LEIDEN • BOSTON

注

¹ ただし、こうした受動態は多くの場合、翻訳においては反映されていない。たとえば、村上正二はこの部分を「[そして] ジュルキン [族] が来てくれることを六日間も待ったが、[いっこうに] だめなので」と訳出している (村上 1970 : 283—284)。また、de Rachewiltz も、この部分を、They sent the message and having waited for six days from the time it should have come to the Jürkin と訳している (de Rachewiltz 2004 : 57)。実際、現代のモンゴル語においても、受動態は不自然らしく、Čeringsodnam の訳においても、jürkin-eče [čerig]kürčü irekü-yi jiryuyan edür küliyejü yadayad となっている (Čeringsodnam 1993:101)。とはいえ、Cleaves のように、この部分を Waiting six days from the[time when it was]to be come by the Jürkin, not being able[to wait any longer]としており、受動態を意識している訳もある (Cleaves 1982 :62)。

² ここで挙げる(1)と(2)は秘史のテキスト内部で扱える事柄であるが、テキスト内部で扱えない事柄もある。たとえば、「ジュルキン集団の先祖」オキン・バルカクが金朝で殺害されている史実が秘史においては黙殺されている。こうしたことは、本論のような秘史のテキスト研究からはみ出るものの、このような重要な史実の黙殺が秘史でどのような物語屈折を引き起こすことになっているのかは今後詳細に検討すべきことである。